

## お姫様の物語

病人は領主の末の娘のアルテシアだった。生まれたときから体が弱くて月に何度も治療師を呼ぶ。どういう病気なのか治療師組合でも分からない。

治療師はすべての病気を治せる訳ではない。治せない病気もたくさんある。それでも熱が出れば熱を下げる薬はあるし、痛みを抑える薬もある。

アルテシア様の病気が治療師組合でもよく分からない病気の一つだということを馬車の中でナリアはリタにこっそりと話してくれた。

「でも悪くなる一方という訳でもないのよ。良くなったり、悪くなったりしているの。ある薬を飲ませた後で良くなったから、その薬をまた飲ませてみると今度は全然効かなかったりして、本当に訳がわからないのよ。ターニア治療師が組合に残されている正体不明の病気についての記録を調べているのだけれど、まだ何も分からないの」

リタは病気のお姫様に同情した。

「アルテシア様のお母様もあまり丈夫な方ではなかったの。アルテシア様が小さいときに亡く

なつてしまったわ」

馬車は立派だったけれど、お城はリタが想像していたようなきらびやかなところではなかった。考えてみれば当然のこと、お城はもともと戦争のためにあるのだから、頑丈さが第一なのだ。石を組み漆喰で固めた白の中は薄暗く、じめじめと湿気が溜まっていた。あまり病人によい環境ではないだろうとリタは思う。

けれどアルテシアの部屋に一行が通されると、そこはリタの想像以上のきれいな部屋だった。壁には乙女と一角獣の描かれたタペストリが掛かっていた。天蓋つきのベッドには人形のようなお姫様が半分体を起して座っていた。

アルテシアの顔色はリタが怖くなるくらいに透き通っていた。治療師ターニアはアルテシアに近づいて熱を調べ、呼吸が乱れていないか確かめた。

「新しい人がいるのね」

アルテシアはリタを見ていった。それだけの言葉を口にしただけで呼吸を整えるためにゆっくりと息をしなければならなかった。

「治療師見習いのリタだよ。ちょっと預かってい

るんだよ。ちゃんと食事はしているかい」

治療師ターニアの問いに、アルテシア付きのメイドが否定的に首を振った。

「蜂蜜をお湯に溶いて飲ませよつか。お湯を持ってきてくれないか」

「アイスクリームがいいわ。治療師たちにも」

アルテシアの言葉に治療師ターニアは少し顔を顰めたが、まあ何も食べないよりはいいだろうと答えた。

「用意できるか伺ってまいります」

「お湯も頼むよ」

治療師ターニアの言葉に「わかりました」と答えてメイドは出て行った。

「あなた、いくつかしら」

アルテシアはリタの年齢を訊ねた。親しかったすぐ上の姉が嫁いで以来、年の近い女の子と話をする機会がなかったのだ。

「十六です」

「あたしより、一つ上ね。毎日どんなことをしているの？ あなたのことを教えて」

苦しそうな息でそう聞かれるとリタは答えない訳にはいかなかった。でも、治療師見習いのことは話せなかったから、見習いになる前の生

活を話して聞かせた。水を汲んだり、お菓子を  
作ったり、お話を聞いたりしたことを話した。

メイドがお湯の入ったポットを持ってきたので、  
治療師ターニアは紅茶の茶碗にお湯を注いで、小  
さな薬草の袋をそこに入れた。治療師ハンナの  
使う袋よりずっと小さくて本当に茶碗一杯分の  
薬しか作れないようなものだった。

お城の台所は遠いからちよつと借りるというわ  
けにいかない。

アルテシアは薬をなかなか飲もうとしなかった  
が、メイドがもう少ししたらアイスクリームが  
届きますよというのと、少しづつ薬を飲んだ。

「リタ、アイスクリームって食べたことある？」  
アルテシアのお気に入りらしいそのお菓子を  
リタは食べたことがなかった。どうやら、初めて  
アイスクリームを食べて驚く顔が見たいらしい。  
お姫様の食べるお菓子だからそれはおいしい  
ものだろうけれど、リタはおいしいお菓子には  
慣れてるから、あまり驚いた顔が出来ないか  
も知れない。そうしたら、アルテシアはがっか  
りするだろうか。

「アイスクリームは罪な食べ物だって、神父様  
は言うのよ。でも、あたしは平気。だって、毎

晩神父様に懺悔しているもの」

アルテシアは途中で休みながらそう言った。

「死ぬ前にそれまでの人生の懺悔をしないと天国にいけないんですって。でも、あたしはいつ死ぬかも知れないから、夜眠ったら朝には死んでいるかも知れないから、毎晩懺悔する必要があるっていうのよ。でも、一日中ベッドの中にいたんじゃ懺悔することもあまりないわ。それで、毎日アイスクリームを食べることにしたので、アルテシアは一言ずつ息を整えながらそこまで話し、そしてまた息を整えて、にこりと笑った。

「アイスクリームに罪だの毒だのがあるってこととはないと思うけどね。でも一つのものばかり食べるのはよくないよ。ちゃんとした料理が食べられないならスープだけでも飲まなければね。それもダメなら蜂蜜か牛乳でも飲んだ方がいい」

「アイスクリームは牛乳から作るって聞いたわ」

「暖かい牛乳を飲んだ方がいいね。しかし、まあ、アイスクリームだって何も食べないよりはいいだろうよ。あんまり喋らない方がいいんじゃないかい。アイスクリームが届いたときに食べる元気がなくなるからね」

アルテシアはそう言われて黙ってしまった。

「さっきの話を続きが聞きたいわ、リタ。どんな物語を聞いていたの？」

ナリアがそう言ったが、それはアルテシアの気持ちを抱きかかっていたのだらう。

「そうね、ゴブリンとかドラゴンとか、それからお姫様の話とか義賊の話とかね。カラタ姉さんはもちろんだけれど、サラもとってもお話が上手なのよ。サラはあたしの友だちと一緒に話を習っていたの。でも今はお話より男の子に夢中みたいだけれど……」

やがて人数分のアイスクリームが届けられた。アルテシアが一口食べると、メイドが「どうぞ皆さんも召し上がってください」と言った。

リタがアイスクリームを乗せたお皿を持つと、それはひんやりと冷えていた。料理だってお菓子だってお菓子が温かい方が美味しいのに。作りたての筈なのに、もう冷えているなんて料理人が手を抜いて作り置きを出したのかしら。

リタはアルテシアがじっと見つめているのがついたら美味しくなかったらなんて言ったらいいんだらう。そう思いながら、リタはアイスクリームをスプーンですくって口に入れた。

冷たさが口の中に広がり、それは甘さによって

消えていった。

「冷たい！ 甘い！ 美味しいわ。こんなお菓子初めて！」

アルテシアはそれを見て満足そうにうなずいた。

「あたし、アイスクリームを食べる時は、いつも最初に食べた時の感動を思い出そうとするのだけれど、どうしても出来ないのよね。でも、今日は出来そうな気がする」

そう言つて、アルテシアはアイスクリームを口に入れた。

リタはもう二度と口にすることはないだろうと思ひながら、少しずつ味わつて食べた。ゆっくりしていると端から溶けてしまふ。治療師組合も氷を熱冷ましに使うことはあるが、真夏に氷を手に入れて使うには、それだけの支払いのある客でないとならない。まして、氷を使つてお菓子を作ることが出来るのは本当に限られた人たちだ。

「今日のお薬はとってもよく効くわ。ほら、もうこんなに元気になってきたわ。あんまり元気だと退屈でお外に出たくなるから、誰かそばにいてお話でもしてくれればいいと思つわ。メイ

ドのお話は聞き飽きたから駄目よ」

「元気なところを見せたかったのかそこまでアルテシアは一気に喋った。しかし話し終わると咳き込んでしまい、そのまましばらく咳をし続けた。メイドが背中をさすって、やがて咳は止まったが、しばらく荒い息が続いた。

「確かにだいぶ元気なようだから、リタが残って相手をしてあげるといいよ。といてもあまり長居をしてアルテシア様を疲れさせてはいけないよ」

治療師ターニアはそう言って引き上げる準備を始めた。

治療師はふつうこんなに病人を甘やかさない。アルテシアが特別扱いなのは領主の娘で治療費をたっぷり貰っているからなのか。それとも、病気のつらさを抑えることは出来ても元気を回復させることが出来ないというひけめからだろうか。

それでもリタはアルテシアが望むならそばいてお話でもなんでもしてあげたいと思った。治療師ハンナはあまり病人に同情してはいけないと言っていたけれど、リタは既にアルテシアに同情してしまっていた。罰を受けて反省したばかりなのに、もつ言いつけを破りそうだった。あ



まりってどのくらいまではいいのだろう。治療師ターニアに聞くこうと思っただけれど、治療の秘密に関わることも知れないから、ここでは聞けない。

残ってお話をするように言われたのだから、今はその通りにしても間違いにはならないだろう。

「この娘はまだあまり街に詳しくないから、帰りは治療師組合まで送っておくれ」

治療師ターニアはそう言ってから、ナリアを連れて部屋を出て行く。部屋から出るときに、こう言った。

「リタ、隙をみてアルテシアに何か食べさせておくれ。スープかできればシチューでも」

大きな声で言ったから、アルテシアにも聞こえただろう。それなのにどうやって隙をみて食べさせたり出来るのか。治療師ターニアは謎をかけたのだろうか。

リタはそんなことを考えながらも、アルテシアにどんな物語を話して聞かせようかと考えた。アルテシアひとりに聞かせるのだから、アルテシアの物語にした方がいいだろう。サラのよう

に上手に話せるといいのだけれど。

あるところに、やさしい領主様の治める小さな領地があつたの。税金は安くて、賦役も少なく、領民は皆しあわせに暮らしていたのよ。作物は豊かに稔り、家畜はよく肥えていたの。

でもその領地にドラゴンが現れて、作物や家畜を食べたの。領主様は配下の騎士を使ってドラゴンを攻撃したのだけれど、ドラゴンの鱗はとても固くて傷を負わせることは出来なかつたの。

領主様はどうしたらいいか分からなくなつて、占師に相談したのよ。占師は何日も部屋に閉じこもつて占いを続けたの。そしてとうとうこう言ったの。

「生贄を捧げればドラゴンは立ち去るだろう。清らかな乙女の生贄を捧げるならば」

領主様はいつそう困つてしまったの。それでもドラゴンが居座り続けては領民が困るだろうとお触れを出したのよ。

「ドラゴンの生贄になりたい乙女は申し出よ。その者には十分な報酬を与え、その家は今後税を免除する」

領主様がもっと酷い人で領民の心が荒れていた

なら、お金のために娘を差し出す親もいたかも知れないけれど、領民たちはそれまでしあわせに暮らしていたので、作物や家畜が襲われたくらいでは娘を生贄にしようとする親はいなかったのよ。

もちろん、自分から生贄になりたいなんて言ひ出す娘はいなかったの。

ところで、領主様には娘がひとりいたの。本当は女の子ばかりだけれど何人も子供がいたの、末娘以外の娘たちはみんなお嫁にいつてしまったの。

領主様の末の娘は、アルテシアという名前だったの。アルテシアはお父さまや領民のことを思いやるとてもやさしい娘だったのよ。そしてアルテシアはお父さまにこう言っつもの。

「あたしが生贄になるわ」

そこでリタはアルテシアの様子を伺った。怒ってるかなとちょっと心配になったのだ。大丈夫、真剣に聞いているよっだ。

アルテシアは体が弱くていつもベッドで寝ていたの。それに、意地悪な神父様から、いつ死ん

でもいいように毎日懺悔をしないさいって言われていたのよ。毎日毎日自分のした悪いことを思い出しながら生きるよりも、お父さまや領民のためになる生贄になつたほうがいいと思つたのね。

領主様はもちろん反対したのよ。それに娘が生贄になると言い出したことでなんて悪いお触れを出してしまつたんだろつって反省もしたの。アルテシアを生贄にするなんて絶対出来なかつたから、大きな声で反対してアルテシアを叱つたの。

でもアルテシアも頑として意見を曲げなかつたの。体は弱かつたけれども強い意志を持つていたのよ。二人が大きな声で言い合いをしていたので　大きな声だつたのは領主様なんだけれど　占師に盗み聞きされてしまつたのよ。

占師は領主様の末娘が生贄に志願したという噂を流すの。占師がそんなことをしたのは占いの結果を本当に信じていたからなの。生贄を捧げないとドラゴンがどんどん悪いことをして人を襲つたりするようになると思つていたの。噂は本当のことだつたから領主様も否定できなかつたのよ。

領民の前にほとんど姿を見せたことがなかったのにアルテシアの人気はとても大きかったの。たくさんの手紙がアルテシアに届けられるのよ。なんて尊い方なんだという手紙もあれば、思い直して生贄になるのは止めてくださいという手紙もあつたわ。

手紙を読むとアルテシアの決心はますます固くなるのよ。そして、これまでのお話で気がついていられるかも知れないけれど、領主様は少し気が弱くて優柔不断なところがあつたの。

それで本当にアルテシアは生贄になってしまふの。

そしてアルテシアはお輿に乗せられてドラゴンが住処にしている洞窟に運ばれるの。お供の者たちはアルテシアを洞窟の入口に降ろすと大急ぎで帰ってしまったのよ。

アルテシアはすぐにドラゴンが出てきて食べられてしまうと思つてじつと待っていたのだけれど、ドラゴンはなかなか出て来なかつたの。

しばらくするとアルテシアは待っているのが怖くなつて、少しずつ洞窟の奥に向かって歩いていったの。体に無理のかからないようにゆっくり歩いたのだけれど、湿った地面に足を滑らせ

そうになって慌ててバランスを取ったりしたから、すぐに疲れてしまったのよ。そして体の具合が悪くなって、その場に座り込んでしまうの。それからゼイゼイと苦しい音を立てて息をし始めるの。

するとその音を聞きつけて、洞窟の奥からドラゴンが出てくるのよ。ドラゴンに近づくと足音に、アルテシアは慌てて息を止めるのだけれど、もともと息苦しいものだからほとんど我慢ができないの。

そしてとうとうアルテシアはドラゴンに見つかってしまったの。食べられちゃうってアルテシアは思うの。でもドラゴンはアルテシアの服を啜えて、洞窟の奥に運んでいくのよ。

洞窟の奥にはドラゴンの巣があって、三匹の赤ちゃんドラゴンがガーゴリーって鳴いていたの。その泣き声はアルテシアの苦しい息とちよっと似ていたの。人間の耳には似ているように聞こえなくとも、お母さんドラゴンには似ているように聞こえたのよ。

それでお母さんドラゴンはアルテシアを赤ちゃんドラゴンだと思ってしまうの。赤ちゃんドラゴンの大きさはちょうどアルテシアくらいだった

の。ドラゴンは大きいけれど、赤ちゃんだからそのくらいの大きさでいいのよ。

ドラゴンが作物を食べたり、家畜を襲ったりしたのは赤ちゃんを産むためだったのよ。赤ちゃんを産んで付きつきりで育てるために栄養が必要だったの。今は赤ちゃんが心配だから、洞窟の外まででは出かけなかったの。だからもう領民たちには被害は出なかったのよ。

アルテシアはドラゴンの巣から逃げ出そうとしたのだけれど、すぐにお母さんドラゴンに見つかって連れ戻されてしまうの。そしてお母さんドラゴンはアルテシアをお乳に押しつけるのよ。鱗の間に小さいお乳が四つあって、赤ちゃんドラゴンはそこからお乳を飲んで育つの。

アルテシアは体調が悪かったし、ドラゴンのお乳なんて飲みたくないと思っていたのだけれど、だんだんお腹が空いてきたので、ちょっとだけお乳を飲んでみたのよ。ドラゴンのお乳は溶けたアイスクリームの味がしたの。

アルテシアは体調が悪かったし、お薬もなかったのずっと苦しい思いをしなければならいだろうと覚悟していたのだけれど。赤ちゃんドラゴンに囲まれているうちにいつの間にか眠って

しまったの。

そして目が覚めたとき、アルテシアはすっかり体調が良くなっていることに気がついたの。生まれてから一度も感じたことがないくらい清々しい気持ちだったの。あたりには臭いドラゴンの匂いが立ち込めていたのにね。

そうなの、お母さんドラゴンのお乳にはアルテシアの病気を治す力があつたのよ。

アルテシアは元気になつたけれど、お母さんドラゴンに連れ戻されてしまうので、洞窟からは出られなかったのよ。仕方がないので赤ちゃんドラゴンとじゃれて遊びながら洞窟から出られる日を待っていたの。

そうしているうちに、アルテシアはとっても遅い女の子になつていったの。どんどん大きくなつていく赤ちゃんドラゴンと毎日じゃれあつていたからよ。それにお母さんドラゴンのお乳には力を強くする働きもあつたのね。

やがて赤ちゃんドラゴンがもう赤ちゃんとは言えないくらい大きくなって、鱗もすっかり硬くなつてくると、お母さんドラゴンは子ドラゴンたちを連れて洞窟から出て、空に飛び立ったのよ。子ドラゴンも初めてで少し頼りなかつたけ



れどちゃんと空を飛ぶことが出来たの。

お母さんドラゴンと子ドラゴンは洞窟の上をぐるりと回りながら飛んで、アルテシアが飛び立つてくるのを待っていたのだけれど、残念ながらアルテシアは飛べなかったの。お母さんドラゴンのお乳にもそこまでの力はなかったのね。ドラゴンたちはずっと空の上でアルテシアを待っていたけれど、暗くなると別々の方向に飛んで行ってしまったの。巣立ちして別れなければならぬ時だったのよ。

アルテシアはお城に戻ってお父さんに会いたいという気持ちも会ったのだけれど、今まで知らなかったお城の外の世界を見たいという気持ちもあったの。そして、お父さんには手紙だけを出して、世界を見て回る冒険の旅にでるのよ。やがて小さな体ですごい力持ちの女冒険家の噂が広まるの。おしまい。

「リタ、あたしがスープを飲まなかったら、叱られるの？」

リタはアルテシアのその問いを真剣に考えてみた。治療師ハンナは出来ないことで叱ったりはしないが、治療師ターニアはどうだかわから

ない。

「叱られるかも知れないわね。あたし、この間治療師の言いつけに反して懲罰組合で罰を受けたばかりだから、また罰を受けるとお尻の皮がもたないわ」

「じゃあ、あたしスープを飲むわ」

「ありがとう。やさしいのね。それに体力を付けないと病気に勝てないわよ」

メイドはアルテシアの言葉を聞くとスープを持って来ましようと言って部屋を出て行き、やがて小さな鍋にスープを入れて戻ってきた。そして、鍋からお皿にスープをよそってアルテシアに渡した。

アルテシアは少しずつスープを飲んだが、スープを飲むだけでも疲れるようで、だんだん息が荒くなってきた。それでも休みながらスープを飲みおえた。

「あたし、そろそろ失礼しないといけないわ」

アルテシアの呼吸が落ち着くのを待って、リタはそう言った。

「お話、とても面白かったわ。またドラゴンの話をしてね」

アルテシアは寂しい気持ちを隠して、にこりと

微笑んだ。

リタは城の従者に送られて治療師組合に帰った。

次の日、まだリタたちが朝食の準備をしている時に、領主の馬車が到着した。アルテシアの症状が悪化したという。治療者ターニアとナリアとリタは急いで馬車に乗って城に向かった。

治療師たちがアルテシアの部屋に入ると、そこには領主様がいた。領主様は腕を組んで黙って壁際に立っていた。アルテシアは昨日よりもさらに青ざめていて、速くて浅い息をしていた。治療師が来たことにも気付かず、うわ言を言っている。

「地獄の業火が……」

アルテシア付きのメイドが治療師たちに説明した。

「昨夜、神父様がアルテシア様にお説教なさって、ドラゴンは邪悪な生き物だから、そんなもののことを考えていると地獄の業火に焼かれるっておっしゃったのです。それを聞いてアルテシア様は怖くなって眠れなかったのでしょうか。朝、私が参りました時にはすっかり疲れて、病状もこ

んなふうになっておりました」

治療師ターニアがアルテシアの病状を調べた。

「もう少し回復しないと薬も飲ませられないね。無理に飲ませてむせたら困るからね」

「アルテシア様、頑張ってください」

メイドがアルテシアの手を取って握った。リタもベッドの反対側にまわってもう片方の手を取った。領主様は部屋の隅で気難しい顔をして立つたままだ。

「アイスクリームを作る氷があるわよね。氷を持って来て貰えないかしら」

リタはそう言ってみた。

「何に使うんだい、リタ。熱はないんだよ」

「でも地獄の業火って言っているから、冷やしてあげたら気持ちが悪くなるんじゃないかと思って」

「それなら、そうしておやり。気持ちが沈んでいるのは病気に勝てないからね」

治療師組合では病人の沈んだ気分までは面倒を見ないが、それは病人ひとりひとり違った気持ちを持っているから、「頑張れ」とか「しっかりしろ」とか「すぐによくなる」という一般的な励まししか出来なかったからだ。病人を励ますために特別なことをしてはいけないという決

まりがあるわけではない。

部屋の外に控えていたメイドが氷を取ってきた。

砕いた氷をタオルに包んで額に当てると、アルテシアはうつすらと目を開けた。

「地獄……」

「大丈夫よ、アルテシア様。あたしが女冒険家アルテシアが地獄に落ちて無事脱出する話をし  
てあげるわ」

リタはアルテシアを励ますためのお話を語り、  
アルテシアは夢うつつで聞いた。

女冒険家アルテシアと人々から呼ばれる娘がいた。小さな体で怪力無双、つまりとつても力持ちだったの。長い髪を後ろでまとめ、革袋を背中に担いで、冒険の旅を続けていたの。

ある時、アルテシアは洞窟に棲む怪物の噂を聞くの。それでアルテシアはその洞窟に行ってみるの。アルテシアはその怪物がドラゴンかも知れないと思ったのよ。

怪物の声のするというその洞窟にアルテシアは入って行ったの。洞窟の奥からは噂のとおり怪物のうめき声のような音が聞こえてきたのよ。

アルテシアは用心しながら洞窟の奥に向かって歩いて行ったの。そしてとうとう洞窟の一番奥に到達したの。そこには地面に大きな穴が開いていて、そこからすごい勢いで風が吹き出していたの。その風の音が怪物のうなり声のように聞こえていたのよ。

アルテシアはその穴がどのくらい深いのか確かめようと、穴の縁から身を乗り出して穴の奥を覗き込んだの。穴はどこまで続いているのか分からないくらい深かったわ。

その時、急に風の向きが変わったのよ。つまり穴から吹き出していた風が、穴に吸い込まれるようになったの。アルテシアはその風に押されて穴の中に落ちてしまったのよ。

穴はどこまでもどこまでも続いていて、アルテシアはいつまでも落ち続けたの。あまり長い時間落ち続けるので、アルテシアは途中でお腹が空いて、背負った革袋の中からクッキーを出して食べたくらいなの。そのくらい長い時間落ち続けたのよ。

その穴は地獄まで続いていたのね。そしてアルテシアは地獄に落ちてしまったの。落ちて行く先には、燃えさかる地獄の業火があつて、アル

テシアは焼かれてしまいそうになるの。

けれど、その時よ。大きなドラゴンがはるか彼方から飛んできて、アルテシアをその大きな背中を受け止めるの。それはお母さんドラゴンだったの。

ドラゴンが邪悪な生き物と言われるのは、それが地獄の生き物だからなのよ。ドラゴンはふだん地獄に棲んでいるの。けれど、赤ちゃんを産む時だけ、安全な地上に出てくるの。だって、地獄は赤ちゃんを生むには危険なところだから。

お母さんドラゴンはアルテシアを地上まで送ってくれるの。でもその前に、アイスクリーム山をかすめて飛んで、アイスクリームをひと欠けら食べてから行くの。そうよ、アイスクリームも罪な食べ物だから地獄にはたっぷりあるのよ。一つの山が全部アイスクリームなの。

こうしてアルテシアは再び地上に戻ってくるの。おしまい。

リタがお話を終えた時、アルテシアは落ち着いた呼吸で静かな寝息を立てて眠っていた。

リタが視線を感じて振り返ると、部屋の入口に神父が立っていて、凄い目つきでリタを睨んでいる。

た。リタも神父に腹を立てていたから、睨み返してやった。

「まあ、これならしばらくは大丈夫じゃないかね。起して薬をやるよりもこのまま寝かせてやった方がいいだろう」

治療師一行は仕事は終わったとひき上げた。

リタは翌日製本された薬事全科を持って村に帰ってきた。家に帰るよりも先に、治療師の家に行く。

「ただいま、治療師。はい、これが製本された薬事全科よ」

「はあ、これはまたずいぶん立派な本になったもんだね。時間をかけただけのことはあるね。じゃあ、それはお前のだから、これからはそれを見て薬を調合しておくれ」

リタは驚いてしまった。

「なんて顔してるんだい。お前は治療師になるんじゃないのかい。だったら薬事全科が必要だろうが。あたしが二冊持っただけでも仕方がないしね」

「あたしの……」

リタはしばらく実感が湧かなかった。

「ありがとう、治療師」



「何言ってるんだい、お前が書き写したんだろ  
うが」

「でも、ありがとう。大切にするわ」

「当たり前だよ。でも、家には持ち帰らないで  
おくれ。ところで、もう家には帰ったのかい」

「薬事全科を持っていたから直接こっちに来たの」

「じゃあ、早くガルムに顔を見せておやり。あ  
たしひとりで街から帰った時には、ガルムにぶ  
たれるかと思ったよ」

「わかったわ、じゃあ、ちょっと家に帰ってくる  
わね」

こうして薬事全科を手に入れたり夕は治療師  
への道を一步進んだのであった。